

国 語

第1問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

行動の規範となる価値観および自己ルールは、最初は母親の期待や要求を介して内面化されたものであり、それは母親の承認を得たいという動機によるものであった。それが母親以外の人々の承認を得たいという欲望が生じることで、徐々に社会に共通する価値観、一般性のある自己ルールに修正されていく。だが、こうした初期の承認欲望は自覚しにくいものであり、しかもその行為が他者に役立つ行為であれば、他者を思いやる利他的な動機も加わり、その行為に承認欲望が潜んでいることは、ますます意識されなくなる。そして価値観と自己ルールがある程度まで固定されると、もはやその動機を思い出さなくとも、その行為に価値があることは自明視されるのだ。これはある程度まで必要なプロセスである。なぜなら、すべての行為の遂行に際して、いちいちその価値を問い直すことなどできはしないし、常に「一般的他者の視点」から内省することなど不可能である。あえてやろうとすれば、極度の心身の疲労によって身が持たない。自己ルールと価値観が形成されるからこそ、こうした心労から身を守りつつその行為の価値を確信し、周囲の価値判断にふりまわされないことができる。

ただ、自分の価値観が周囲の人々の価値観とあまりに異なっていれば、普通は強固にその価値を確信し続けることはできず、大抵、そうした価値観に基づく行為に対して、他者の評価が気になり、他者の承認を求めるようになる。そうでなければ、自己の存在価値を確信し続けるのは困難であろう。このような場合こそ、「一般的他者の視点」が必要になる。そして現代社会では、その必要性が総じて高まっているのである。

一般的に、個人の価値観は社会共通の価値観に基づいて形成されるため、それほど周囲の人々の価値観と大きな違いは生じない、と考えることができる。

子どもに対する親の要求や期待は社会の価値観や文化的慣習に準じたものであり、それによって子どもの内面に形成された価値観・自己ルールは、社会生活のなかでさらに一般性のあるものに修正されている。そして、社会全体に浸透している価値観に基づく行動であれば、社会はそれを正当な行為と見なし、批判するようなことはない。むしろ共感やシヨウサンに値する行為として評価され、その社会の人々から広く承認を得ることができる。

古来、社会は特定の宗教や文化的慣習、I イデオロギーを共有し、その価値観に基づく社会規範によって成り立ってきた。中世ヨーロッパのようにキリスト教への信仰が強い社会なら、親も他の人々もキリスト教に基づく価値観、慣習を要求し、それに基づく行為のみを承認するため、自然に同じような価値観や慣習を身につけることになる。中近東諸国のイスラム教にしろ、少し前までのソ連や中国の共産主義にしろ、すべて同じことが言える。宗教や政治思想でな

くとも、一定の社会的慣習や共有された価値観があれば、それは個人の内面にまで浸透し、人々はその価値観に準じて行動することになるのだ。

Ⅹ、特定の価値観が共有された社会、特にその価値観が強い影響力を持つ社会では、価値観の異なる多様な人々を想定する必要性があまり生じない。いちいち他者の立場を顧みなくても、その価値観に沿った行動の価値を信じていることができるし、Ⅱに周囲の承認を得る可能性も高からだ。成長過程において親以外の人々の価値観に触れても、そこにあまり違いがないため、その価値を再検討する必要も生じないし、「一般的他者の視点」も形成されにくい。

しかし近代社会になると、自然科学の発展にともなって宗教的価値観の絶対性はゆらぎ、しかも交通手段の進歩と社会構造の変化により、世界の多様な価値観が会うようになる。それは多様な価値観のなかで共通性を求め、より一般性のある価値を考えようとする視線を生み出したと言える。普遍的な価値を求めて、人間はさまざまな立場の人々を想定した上で、誰もが納得し得る価値判断を導き出そうとした。「一般的他者の視点」とは、まさに近代社会におけるこうした要請が生み出した視線なのである。

だが現在、一般性のある価値、普遍的な価値そのものへの疑義がゾウフクし、価値相対主義が蔓延している。こうなると、Ⅲには保たれているように見える社会規範や社会共通の価値観も信頼できず、自己価値にもゆらぎが生じざるを得ない。社会が共有する大きな価値を信憑し、それに準じた行動を取れば自己価値も保証される、という状況はもはやクズれつつあるのだ。

こうした社会では、自己価値を確認するための価値基準が見えないため、身近な人々の承認だけが頼りになる。そのため、親の影響下に形成された自己ルールや価値観は、一般性のあるものに修正することが難しくなり、親の承認に執着し続けることになりやすい。あるいは、自分の価値観・自己ルールに自信が持てず、仲間の承認を維持するために同調し続ける人もいるだろう。他者の承認を無視して自己中心的に自己承認する場合もあるが、大抵は一時的なものにすぎない。

いま、多くの若者が強い承認の不安を感じ、「空虚な承認ゲーム」に陥っている背景には、こうした現代特有の心理が潜んでいる。価値観の相対化という時代の波のなかで、多くの人が自己価値を確認する参照枠を失い、自己価値への直接的な他者の承認を渴望しはじめている。そして身近な人々の承認に拘泥したコミュニケーションを繰り返した結果、極度のストレスを抱えたり、その承認を獲得することができず、虚無感や抑うつ感に襲われている。

現代が承認不安に満ちた時代なのは、まさにこのような理由からなのである。

この章では、人間の承認欲望がいかにして生まれ、その対象や内実を変えてゆくのかを心の発達に即して考えてきた。親の親和的承認から仲間の集団的承認へ、そして社会における多くの人々からの一般的承認へと、承認欲望がその対象を拡大するにつれ、各々の承認は相互ホカンの承認不安を解消し、自己価値の失墜を防ぎ、「生きる意味」を確保するようになる。

一方で、私たちは他者の承認を介して価値観と自己ルールを形成し、ある程度まで他者の承認

がなくとも、自らの行為に価値があることを信じ、自分の存在価値を自己承認することが可能になる。それは社会共通の価値観に準じたものである限り、実際に周囲の承認を得ることもできる。

Y、社会共通の価値観への信頼がゆらぎ、価値相対主義的な見方が広まりつつある現在、「一般的な他者の視点」は育まねず、自己価値の承認を確保する上で、身近な人々の承認がきわめて重要なものになっている。かつては成長過程のなかで、身近な他者の承認に固執している段階から社会共通の価値観に基づく他者一般の承認に眼が向けられていた。しかし現代社会では、この移行がうまく進展しないのだ。

とはいえ、異なった価値観の人間同士の間に通了解の可能性がないわけではない、と私は考えている。

Z、まったく趣味や感性、信条の異なる人間の間でも、困っている人を助けるのは「価値ある行為」である、と普通は誰もが認めるにちがいない。客観的に正しい価値が見出せなくとも、多くの人が共通了解し得る価値を見出すことは可能であり、異なる価値観の間でも、メタレベルで一般性のある価値を認め合うことはできる。というより、多様な価値観が対立する時代だからこそ、IVな価値観の支配する近代以前に比べ、共通の価値を求める「一般的な他者の視点」が必要とされる時代にトツニユウした、と考えることができる。

(山竹伸二『認められたい』の正体——承認不安の時代』による)

(注) メタレベル——高次の水準。

問1 二重傍線部ア～オのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

ア ショウサン
イ ゾウフク
ウ クズレ
エ ホカン
オ トツニユウ

1
2
3
4
5

問2 傍線部a～eの漢字の読みをひらがなで記せ。

a 潜んで
b 遂行
c 渴望
d 失墜
e 固執

6
7
8
9
10

問3 波線部あ～うの語の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

あ 利他的

11

- ① 自分が有利になるように他者を利用するさま
- ② 自分が他者に利用されても拒否しないさま
- ③ 他者に利益を与えて自分も利益を得るさま
- ④ 自分の利益を犠牲にして他者を助けるさま
- ⑤ 自分と他者の利益や損害を一致させるさま

い 蔓延

12

- ① 勢いが盛んになること
- ② おおいかぶさること
- ③ すきまなく埋め尽くすこと
- ④ 複雑にからみつくこと
- ⑤ はびこり広がること

う 拘泥

13

- ① 必要以上に気にすること
- ② 何よりも優先すること
- ③ 振り回されてしまうこと
- ④ 努力が無駄になること
- ⑤ あてのない望みを抱くこと

問4 空欄 I 〱 IV に入る語として最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上選ばないこと。

I 14 ・ II 15 ・ III 16 ・ IV 17

- ① 表面的
- ② 相対的
- ③ 一元的
- ④ 結果的
- ⑤ 体系的
- ⑥ 政治的

問5 空欄 X 〱 Z に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上選ばないこと。 X 18 ・ Y 19 ・ Z 20

- ① すなわち
- ② ただし
- ③ したがって
- ④ たとえば
- ⑤ しかし

問6 傍線部 A 「自己ルールと価値観が形成される」とあるが、それらについての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 21

① 自己ルールと価値観は、最初は母親の期待や要求を介して内面化されたもので、母親の承認を得たいという動機によるものであったが、他の人々の承認を得たいと思うようになると、その規範としての性格がいつそう強まる。

② 自己ルールと価値観は、最初は母親の承認を、さらには他の人々の承認を得たいという動機から、彼らの期待や要求に適応した行動を自発的にとろうとして形成されたものだが、その承認欲望そのものは潜在化していることが多い。

③ 自己ルールと価値観は、母親の承認を得たいという欲望をはっきり自覚して、母親の期待や要求に積極的にこたえようとすることから生じるのであり、母親以外の人々の期待や要求に応じたものへと一般化されていく。

④ 自己ルールと価値観は、母親の承認を得たいという動機から母親の期待や要求を内面化したものであるが、やがて母親以外の人々の承認を得たいという欲望が生じることで、修正を余儀なくされて他律的なものに変容する。

⑤ 自己ルールと価値観は、母親の承認を得たいという動機がもとになって、母親の期待や要求がそのまま規範となって自分の行動を規制することから始まり、やがて他の人々の期待や要求も取り込んでより強い規範となっていく。

問7 傍線部B「現代社会では、その必要性が総じて高まっている」とあるが、それはなぜか。

その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

22

① 現代社会では自然科学の発達にともなって宗教的価値観の絶対性がゆらぎ、また交通手段の進歩と社会構造の変化により、世界の多様な価値観が会うようになったため、より一般的な価値観が要請されるようになったから。

② 現代社会では自己価値を確認するための価値基準が見えず、身近な人々の承認だけが頼りになるため、親の影響下に形成された自己ルールや価値観を一般化することが難しくなり、親の承認に執着し続けることになるから。

③ 現代社会では子どもの内面に形成された価値観・自己ルールが社会全体に浸透している価値観と異なっていなければ、それに基づく行為は正当なものと見なされ、共感などに値する行為として評価されることになるから。

④ 現代社会では自分の価値観と周囲の人々の価値観とが大きく異なっており、自己の存在価値を確信し続けるのが困難となるため、宗教や政治思想に基づく特定の価値観や慣習が強く求められるようになっていいるから。

⑤ 現代社会では社会共通の価値観への信頼がゆらぎ、価値相対主義的な見方が広まりつつあるため、異なった価値観の人間同士の間で共通理解が生じにくく、また自己価値を確保する上で身近な人々の承認が重要になるから。

問8 傍線部C「このような理由」とはどのような理由か。その説明として最も適当なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選べ。

23

- ① 社会が共有する大きな価値を信憑し、それに準じた行動を取ることができずに、自己中心的に自己承認する結果、極度のストレスを抱えたり、承認を得られず虚無感や抑うつ感に襲われたりするという理由。
- ② 自分の価値観・自己ルールを形成できないままに身近な人々の承認に拘泥したコミュニケーションを繰り返す結果、極度のストレスを抱えたり、承認を得られず虚無感や抑うつ感に襲われたりするという理由。
- ③ 自分の価値観・自己ルールに自信が持てず、他者に同調するか、あるいは他者の承認を無視するかの判断に迷って、極度のストレスを抱えたり、承認を得られず虚無感や抑うつ感に襲われたりするという理由。
- ④ 価値観の多様化と相対化によって自己価値を確認する参照枠を見出せないために、身近な他人の承認を得ようと極度のストレスを抱えたり、承認を得られず虚無感や抑うつ感に襲われたりするという理由。
- ⑤ 普遍的な価値を求めてさまざまな立場の人々を想定して、誰もが納得し得る価値判断を導き出すことに失敗したために、極度のストレスを抱えたり、承認を得られず虚無感や抑うつ感に襲われたりするという理由。

問9 傍線部D「異なった価値観の人間同士の間に通了解の可能性がないわけではない」と私は考えている」とあるが、筆者がこのように考える根拠は何か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 24

① 趣味や感性、信条が異なっても、困っている人を助けるのは「価値ある行為」であると誰もが認めるように、「一般的他者の視点」に立った人道的な行為であれば、人はそこに価値を見出すから。

② 「一般的他者の視点」に立って行動すれば、たとえ異なる価値観の間でもメタレベルで一般性のある価値を認め合うことはできるので、互いの価値観の相違を理解する道が開けてくるから。

③ たとえ多様な価値観が対立していても、困っている人を助けるような行為は、「一般的他者の視点」に立てば客観的に正しい価値のある行為であると誰もが認める可能性が非常に高いから。

④ 共通の価値を求める「一般的他者の視点」を取り入れれば、身近な他者の承認に固執している段階から、社会共通の価値観に基づく他者一般の承認に眼が向けられる段階に移行できるから。

⑤ 困っている人を助けるのは「価値ある行為」であると誰もが認めるように、多様な価値観のなかで共通性を求めようとする「一般的他者の視点」によって、より高次の社会共通の価値観を見出すことができるから。

問10 本文の内容に合致しないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 25

① 一定の社会的慣習や共有された価値観が強い影響力を持つ社会では、それらが個人の内にまで浸透して、人々はその価値観に準じて行動する。

② 人間の承認欲望は母親の親和的承認、仲間の集团的承認、社会の一般的承認と発展していくものであるが、現代ではそれが困難になっている。

③ 現代は多様な価値観が対立する時代であるとはいえ、近代以前のように多くの人が社会共通の特定の価値観を共有することは不可能ではない。

④ 個人の価値観が社会共通の価値観に基づいて形成される社会では、価値観がゆるぐことはなく、「一般的他者の視点」は形成されにくい。

⑤ いま多くの若者が身近な人々の承認に執着しているのは、自己ルールや価値観を一般性のあるものに修正することが難しいからである。

第2問

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

一九八〇年代以降のグローバリゼーションとは、グローバル市場、すなわち世界規模のジュウウと供給のシステムがあらゆる領域に拡がっていく動きであるとともに、国家を形骸化させるものだった。

市場経済は世界的に拡大し、そして前面化していく。経済のグローバリゼーションは限定的な領域にとどまるのではなく、社会に変化をもたらし、あらゆる人々を巻き込んで展開していくことになった。これによって、諸国家の政治のあり方は変わっていく。

この動きによって影響があるのは、まず、主権国家体制というそれまでの世界を組織してきた秩序の形態である。主権とは、一般的には、「政治的な決定と行使に関する最高の権限」として定義される。つまり、主権は、対内的には、独占的に決定をおこなうことができる最高の権力であり、対外的には、外部から干渉を受けることなく独立して統治をおこなうことができる権力のことである。したがって、主権は至高性と自律性から特徴づけられており、この二つの特徴をA 化したものが主権国家である。ところが、グローバリゼーションによって、国家が自律的に統治をおこなう主権国家であるとは言えない状態になる。なぜかというと、現代の国家は経済的發展をその主要なニムムと[↑]考えており、グローバル市場の拡大が進んでいく状況のなかで国家が経済的に発展していくにはグローバル経済秩序のなかに自らを組み込む必要があるからだ。

企業が世界市場を考慮に入れなければ成長できない状況にあるのと同じように、現代の国家はグローバル化に対応しなければ国家そのものの発展がありえない。そのため、国家は自国内で完結する統治をおこなうのではなく、むしろ統治をおこなうためにグローバルな経済秩序への従属を優先させるのである。「市場開放」や「規制カンワ」などの国家の「制度改革」によって、国家は、主権国家としてのあり方、つまり、「独立して統治をおこなうことができ、独占的に決定をおこなうことができる」という状態を自らの手で変えていつている。こうして、主権国家を前提として成り立ってきた国際政治秩序は、徐々に市場原理に基づいたグローバル経済秩序へと移行していく。

そして、世界秩序の軸が主権国家からグローバル市場経済へ、国家の軸が政治から経済へと変化していくことによって、当然ながら、統治の形態も変化し、統治の対象となる人々のあり方も変容していくことになる。近代の国家は、その成立と存続の基盤を「国民」にあるとしている。「国民」という政治的主体は、国家が制定する法に従う主体であり、そしてまた、国家の統治のX 性を保証する根拠である。「国民」なしには国家は成立せず、そのなかで人々は自らを「国民」として同定していく。しかし、グローバル経済秩序が主権国家に優先していく状況において、^B「国民」としての人間のあり方も変化せざるをえない。

グローバル市場経済では、「国民」のような政治的主体は必要とされない。そこで必要とされ

ているのは、経済活動をおこなう「ホモ・エコノミクス」、あるいは単なる「生きもの」としての人間である。「ホモ・エコノミクス」とは、私的な欲望に基づいて利益を求め、合理的に経済活動をおこなうと想定される人間のことだ。合理的な経済活動とは、行為の結果が最大化するよう行動することである。つまり、市場経済のなかで、人間が自由な判断で合理的に行動し、労働し、生産し、経営し、消費することなどを意味する。市場経済はそのようなアクターを必要としているが、ただし、そこで要請されているのは政治的意思をもって介入しようとする「主体」ではなく、市場のルールに従って市場を機能させるシステムの要素、その時々によって「労働者」「生産者」「消費者」などの役割を担う経済のエージェントなのである。わたしたちは、日々、企業にツトめる「労働者」であつたり、ものを作る「生産者」であつたり、そしてあるときには商品を買う「消費者」だ。

そしてさらに、例えば「労働者」としての人間は労働量に分解されリソースとして管理されるというように、市場経済は人間からますます主体としての性格を消し去っていく。グローバルな統治においては、このような人間の非主体化・非B化が生じてくる。そしてもはや、政治的地位を持つ「国民」である必要もなくなるということになる。

「国民」という政治的主体は、国家のなかでさまざまな拘束を受けるが、その代わりに、権利を与えられたり、保護の対象とされたりする。けれども、統治の軸が国家からグローバル市場経済に移っていくと、人々は国家の保護がキハク化したところでグローバル市場に直接的にさらされることになる。

I、グローバル市場の仕組みは、市場から排除されると生存を維持することさえできないものとして作られており、Y的に生にかかわるものとして現れる。だから、例えば、第二六六代ローマ法王フランシスコは、現代の経済システムを、抑圧されソガイされた人々を野ざらしに放置していると批判する。グローバル市場経済は人間から「主体性」を剥ぎ取り、何の庇護の下にもない「剥き出しの生」としての人間に対する管理をおこなう。それは、食べて生きていく「生きもの」としての人間に対する統治なのである。つまり、そこでは、「人格」も「人権」も失効している。それが、政治を後退させた経済的統治の様相だ。

II、グローバリゼーションの時代における統治は、ミシエル・フーコーがテーマ化した政治の側面を際立たせることになる。生政治とは、フーコーによると、政治が「人口」を問題にしはじめたときに生じたものであり、「人口集団 (population) としてとらえられた生活者の総体に固有な現象、すなわち健康、衛生、出生率、^キジユミヨウ、人種などの現象によって統治実践に対して提起される諸問題を、合理化しようとする十八世紀以来のやりかた」である。^(注)

このようなフーコーの考え方を受けて、^(注)ジョルジョ・アガンベンは、生物学的な生に対する統治をおこなう生政治的な空間である強制収容所を近代の政治の隠れた範例としてとらえた。強制収容所とは、人間の生を管理の対象とする究極の場所であると同時に、もはや何を「人間」と規

定すべきなのかも不明瞭にし、「人間」を単なる「生きもの」として扱う場所だ。例えば、かつてのアウシュヴィッツ強制収容所や、現代であれば、「テロリスト」とみなされた人々が裁判にかけられることもなく拘留されるグアンタナモ収容所だ。アガンベンはこうした強制収容所を、政治の範例ととらえた。生に対する統治は、もはや「例外状態」と呼ぶべきものではなく、常態化した統治の方法となった。その意味で、アガンベンは、生政治の空間としての強制収容所がわたりたたちが現在生きている政治空間のモデルとなっていることを示したのである。

生政治はグローバル市場経済が前面化してくるによって際立つてくる。グローバル市場経済のなかで人々が「生きもの」として扱われ管理されるという状況は、アガンベンの言う政治の強制収容所モデルの別の現れ方であり、ここでは、構築された社会組織というよりも、ひとりひとりの人間の生に対する直接的な統治がおこなわれているのである。

そしてアガンベンは、グローバルゼーションのもとにおける人間の政治的・存在論的状况を人々の「難民」化としてとらえた。国家に帰属しない、そこから排除されたもの、「国民」ではないもの、それが「難民」である。

^(注) ハンナ・アレントは『全体主義の起原』のなかで、第一次世界大戦後に生み出された難民と無国籍者の「大群」について次のように書いた。

ネイションの基礎をなしていた民族―領土―国家の旧来の三位一体から諸事件によって放り出された人々は、すべて故国を持たぬ無国籍者のままに放置された。国籍を持つことで保証されていた権利を一旦失った人々は、すべて無権利なままに放置された。

Ⅲ、難民とは、「民族―領土―国家」から締め出されることによって権利を失った人々である。今日、国民として保護されるよりも、国家の「制度改革」のなかで保護の枠組みを取り払われた人々とは、「難民」の姿に似ている。それが現在の世界の人々の「Z」的な様態であるとするれば、国家は存在していても、かつてのように国民に権利を与え保護するものではなくなったということである。アレントは大量の難民の発生を「国民国家の没落」としてとらえたが、現代のグローバルゼーションによって、「国民国家の没落」は明らかかなものとなった。

^(すがこうこ) 菅香子『共同体のかたち——イメージと人々の存在をめぐって』による。

(注) ミシェル・フーコー——フランスの哲学者（一九二六―一九八四）。

ジョルジョ・アガンベン——イタリアの哲学者（一九四二―）。

ハンナ・アレント——ドイツ出身の哲学者（一九〇六―一九七五）。

問1 二重傍線部ア～キのカタカナを漢字に改めよ。(楷書で記すこと。)

| | | |
|---|-------|----|
| ア | ジユヨウ | 26 |
| イ | ニンム | 27 |
| ウ | カンワ | 28 |
| エ | ツトめる | 29 |
| オ | キハク | 30 |
| カ | ソガイ | 31 |
| キ | ジユミヨウ | 32 |

問2 傍線部 a・b の漢字の読みをひらがなで記せ。

| | | |
|---|----|----|
| a | 剥ぎ | 33 |
| b | 一旦 | 34 |

問3 波線部あ・いの語の本文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。

- あ 形骸化 35
- ① 内容を充実させることより、外見や形式を重視することになること。
 - ② 本来のありかたが維持できず、ゆがんだ姿や形になってしまうこと。
 - ③ いのちが失われ、そのもの自体もなくなってしまうこと。
 - ④ そのものの内実は失われ、ただ形だけを残すものになること。
 - ⑤ 本来の目的を見失い、柔軟性をなくしてしまうこと。
- い 自律 36
- ① 自分が決めた規範に従って物事を行うこと。
 - ② 自分と他人を区別し、自分中心に振る舞うこと。
 - ③ 自分で自分を奮い立たせて事にあたること。
 - ④ 他人にやさしく、自分に厳しく振る舞うこと。
 - ⑤ 自分以外のものの助けなしに物事を行うこと。

問4 空欄 I ～ III に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上選ばないこと。

I 37 ・ II 38 ・ III 39

- ① さらに
- ② したがって
- ③ ところで
- ④ 例えば
- ⑤ すなわち

- 問5 空欄 A・B に入る語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。 A 40・B 41
- A ① 対等 ② 先鋭 ③ 具現 ④ 図式 ⑤ 象徴
- B ① 公正 ② 常識 ③ 人稱 ④ 効率 ⑤ 規格

- 問6 空欄 X～Z に入る語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度以上選ばないこと。 X 42・Y 43・Z 44
- ① 一般 ② 表面 ③ 根本 ④ 正統 ⑤ 間接

問7 傍線部 A「統治をおこなうためにグローバルな経済秩序への従属を優先させる」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- 45
- ① 現代では経済がグローバル化し、国家権力以上の力を有しているため、グローバル市場経済の力を利用することでしか、国家としての独立した統治が成り立たないということ。
- ② グローバル化した市場原理が主権国家の存在を脅かす現代においては、国家の統治より他国との熾烈な経済競争に力を入れざるをえない状況に追い込まれているということ。
- ③ グローバル化した経済が国家以上の力を持つ現代においては、国家が経済に従属し、経済的に豊かになることで、政治的基盤である国民の支持を取り付けるしかないということ。
- ④ 現代の国家は経済を中心としたものになっており、グローバル経済に依存して獲得した経済力によって国民を自律的に統治・コントロールしていくしかないということ。
- ⑤ 国家の役割が経済中心になっており、かつ経済はグローバル化したため、グローバル経済に自らを組み込むことでしか、国家は統治をすることができなくなったということ。

問8 傍線部B「『国民』としての人間のあり方も変化せざるをえない」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 46

- ① それまでは国家存続の基盤として、何ものにも拘束されない、自由と権利を持つ政治的主体であったものが、単なる経済のエージェントになってしまったということ。
- ② それまでは国家の統治の根拠としての政治的主体であった国民が、自由な判断力や主体性を失い、むき出しの状態で直接的に管理される存在になったということ。
- ③ それまでは国家の成立を支える政治的主体であった国民が、市場経済のなかで常に消費者であることを求められ、私的な欲望に基づいて行動する生きものになったということ。
- ④ それまでは統治の対象としての政治的主体であった国民が、経済的主体に変化し、国家の保護が弱くなったなかで、合理的に行動し消費する存在となったということ。
- ⑤ それまで法に従う政治的主体であった国民は、グローバルな市場経済に直接さらされ、市場ルールに従うシステムの要素にすぎない存在になったということ。

問9 傍線部C「生政治」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 47

- ① 十八世紀に起こった人口問題に対し、人間のあり方を尊重し合理的に問題解決を図ろうとして出てきたもので、グローバル化によって世界に広がった統治方法のこと。
- ② フーコーが着目し、合理的な方法として評価したが、アガンベンが収容所にととえて批判したもので、人間を単なる生きものとして管理しようとする統治方法のこと。
- ③ 強制収容所を隠れたモデルとし、生きている人間を単なる生きものとして扱い、人間の「生」を直接的に管理しようとするもので、現代ではありふれた統治方法のこと。
- ④ グローバル市場経済によつて起こった人口の増加という問題に対応して生まれた統治の方法で、強制収容所を範例とするような、非人間的な統治の方法のこと。
- ⑤ 人口増加問題に対応し、人口を抑制することを目的として、国家に敵対する人々を直接的に管理し、国民を強制的に収容することも辞さない統治方法のこと。

問10 傍線部D「『難民』の姿に似ている」とあるが、本文において「難民」はどのようなものとしてとらえられているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 48

- ① グローバリゼーションのもとで、「民族―領土―国家」という強制収容所的な枠組みから締め出され、国民としての権利や国家からの保護を失った人々のこと。
- ② 国民国家の没落の現れととらえられるもので、国家からの保護もなく、国民としての権利も奪われた、現代の人々の置かれた政治的状況を比喩的に表現したもの。
- ③ グローバリゼーションのもとで、人間が置かれた政治的・存在論的状況を比喩的に表現したもので、自ら国家の呪縛から逃れ、国民としての条件を失った人々のこと。
- ④ グローバリゼーションのもとで、現代の人々が置かれた存在論的状況を、ハンナ・アレントがとらえて名付けたもので、国家に属せず、権利や保護も失われた人々のこと。
- ⑤ 第一次世界大戦後大量に生み出された人々で、国家から排除されて権利も保護も奪われて放置され、もはや国民ではなくなってしまった人々のこと。

問11 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 49

- ① 現代では統治の軸が国家からグローバル市場経済に移り、人々の生は直接的に市場にさられるものになった。
- ② グローバル市場経済では「ホモ・エコノミクス」としての人間は不要となり、単なる生きものとして扱われるようになった。
- ③ 消費者としての人間は、欲望に基づき合理的に振る舞うが、労働者としては単なる労働力にすぎない存在となってしまう。
- ④ 現在の国民は政治的・経済的な活動を幅広くおこなう存在になったため、それを支える主権国家のあり方が変わろうとしている。
- ⑤ 国家が形骸化したことでグローバリゼーションがすすみ、市場経済が人間のあり方を変えようとする状況が生まれしてきた。

(国語の問題は終わり)